芸術の力について思うこと

金田　晉

［「平成22年度地域文化功労者（文部科学大臣表彰）」受彰を記念する祝賀会は呉、東広島、広島で開いていただきましたが、本稿は広島で開かれた会で、私が行ったお礼の挨拶を基にリライトした文章です。］

さる3月11日の東日本大震災により、都市が、港が、田や畑が、そして多くの人がアッという間に、波に呑みこまれてしまいました。犠牲になられた方々に深く哀悼の意を表し、ご冥福をお祈りいたします。そこに福島原子力発電所の事故が重なりました。そのような塗炭の苦しみの中でも、人々はそれを内に秘めながら復旧、復興への一歩を踏み出しています。激励のエールを送りたいと思います。

そのような中で20日、9日ぶりに宮城県石巻市で16歳の少年阿部任君とその祖母の80歳の女性が救出されました。奇跡のような出来事でした。救出にあたった警察官が、将来の夢は、と任君に聞いたところ、芸術家になりたいと、はっきり答えたということです。倒壊した家屋の、人が立てないほどの低い天井のすき間の闇の中にいて、任君は、祖母をはげまし、生命を信じつづけたそうです。その任君の心の支えに、芸術家への意志があったことを聞き、芸術の世界に関わっている私に、はたと居住まいを正す衝撃をあたえてくれました。ふつう芸術と言えば、贅沢、無用のものとみなされることが多く、私たち自身もついそのような世評になびいてしまいそうになりがちです。任君の言葉は、大人の弱気をはね飛ばす迫力を秘めていました。

今までにも、芸術が生命を支える意志であることを感じたことがありました。30年近く前、広島市文化事業団発行の美術年鑑『美術ひろしま』に掲載するよう依頼され、私は当時研究室にいた大学院生と共同で8年がかりで「戦後広島の美術年譜」１９４５―１９８２を調査執筆し、それを84年度（第3巻）から91年度まで8

回に分載したことがあります。「年譜1」は、原爆で一面焼け野原になった広島の地で、被爆して3ヶ月後も経たない10月1日に「広島県社会教育課が復活、文化復興を目的として活動開始」の記事ではじまり、同じ月に「太田忠、福井芳郎らによる広島鉄道局講堂でのグループ展が開かれ、それが戦後最初の美術展であった、と聞く。」という記事がつづきます。「と聞く」としたのは、残念ながら、それを跡づける証拠を見つけることができなかったからです。だがその伝聞は、広島の文化復興のかがり火として、いつまでも大事にしてゆきたいと思います。翌年の1月28日には、「広島美術家連盟結成」という記事があります。大木茂、福井芳郎、田中喜一、野村守夫、柿手春三など戦時中なお広島で絵を描きつづけていた画家たちが集まり、「郷土美術文化の昂揚と新生日本の地方文化確立を目指して在広美術家の団結を固めるため、毎月1回研究会を開く」と謳っています。この研究会は、昭和24年広島県美術展が開かれるまで、広島美術復興の中心でありました。2月には、同じく全市焼け野原になった呉市にも「芸南文化同人会」が結成されました。家もない、着るものもない、食べるものもたりない時代の、奇跡のような話だと、私はそのページを見るたびに、ジーンとしてしまいます。広島の戦後復興に文化行政の立場から尽力された水彩画家名柄正之の名も忘れられません。

『中国年鑑』昭和24年度版には、戦時中アヴァンギャルドの最後の拠点「美術文化」展で制作発表し、戦後中国新聞の文化欄を担当していた紺野耕一が当時の美術状況に言及しています。日展への広島の応募作品は、数こそ全国で5指に入るほど多いのに、入選作が少ない、これはどうしたことかと問いかけています。それに対して、「年譜2」の総説で私はこう解釈しました。「在広の画家たちは声高に原爆被災の現実を直接法では語らなかった。あるいは語れなかった。かれらにとって被爆は思想ではなく、肉体であった。ひき離そうとして引き離せない自らの傷痕であり、肉親や友人の死であり、焼けただれた土地であった。以前のように生活することが夢であり、その夢を絵筆に託していたと言うべきだろう。〈中略〉かれらは海や山ののどかな自然風景や日常生活のほのぼのとした寸景をいとおしんだ。」庭の花や家族の、他の地域では日常の当たり前の風景が、ここ広島では崩れてしまった追憶であり、夢であったのだ、と。だがその夢を切々と描いたエネルギーが、広島を復興させたのだ、と思いました。昭和26年3月13日の「中国新聞」に、原民喜は次の詩を載せて自ら命を断ちました。

「ヒロシマのデルタに　若葉　うずまけ／死と焔の記憶に　よき祈りよ　こもれ／とはのみどりを　永遠のみどりを／ヒロシマのデルタに　青葉　したたれ」

は、昭和20年の広島にだけあてはまるのではなく、三陸地方から福島、茨城にいたる500キロメートルにおよぶ太平洋岸を襲った地

震と津波の跡についても言える祈りでありましょう。廃墟の芸術あるいは文化を希求するこの二つの出来事には、生命のギリギリのところで不在を存在にかえたい、無を有に逆転したいという共通の意志が働いていたように思います。

そのエネルギーは、戦時中の広島にもふつふつと沸いていました。昭和21年、終戦直後中国で戦病死した靉光の遺作展が広島で開催されたとき、戦時中「自由美術」の仲間であった稲田三郎は、「広島は現在も亦鬼才靉光の血を受け継ぐアバンガルドの燦然たる美の殿堂である」という檄を、展覧会リーフレットに届けました。年譜を作成しながら、私はいくどもその靉光の系譜を確認いたしました。そこに、私が以後に記す広島の芸術の系譜をつなげてみたいと思います。

私が広島大学に着任したのは昭和44年2月です。世の中は少し落ち着きを取り戻していた時代でした。大阪万博の前年でした。当時、新幹線はまだ新大阪までしか開通していませんでした。新大阪で在来線の特急列車に乗り換えて、はじめて広島の地を踏みました。まだ広島城の周辺から太田川にかけて、「原爆スラム」とよばれたバラックが建っていた頃でした。広島大学では、教養部長等を歴任され、のちに広島県立美術館長も務められたドイツ文学の羽白幸雄先生にお会いしました。先生は、広島は文化が通り過ぎてゆく市だ、広島の文化のために、靴跡でも残してくれたまえ、と訓示されました。たしかにその時代、劇団も楽団も関西で夜興業して、夜行列車で九州に行ってしまう、広島は文化が素通りしてゆくという話を、その後もよく耳にしました。廃墟の中で裸形で芸術を希求した精神は、物質的復興が果たされたとき、また欠如態として文化を求める意識が芽生えていました。広島はハイピッチに文化的都市へと成長してゆきました。

前年の昭和43年、広島県立美術館が開館していました。それから10年後、ひろしま美術館がオープンして、フランス印象派からエコール・ド・パリの作品をいつでも見ることのできる都市になりました。大学で、質のよくないスライドを映しながら、芸術学の講義をしていた私にとっては、ほんとうに涙が出るほど感激的な出来事でした。広島の市民や学生たちが、デパートや美術館で、日程の限られた期間に催される巡回展に接するのではなく、仕事の合間に、あるいは授業の合間に、いわば「日常性」の中で世界美術史を飾る画家たちの、きわめて質の高い作品を見ることができるようになったのです。ちょうどその頃、東北大学文学部に幾度も「現象学的美学」の集中講義に出かけていましたが、美術史の学生の夏の研修旅行には、倉敷の大原美術館と並べていつもひろしま美術館がスケジュールの中に加えられていました。ひろしま美術館が、広島の美術文化に果たした貢献ははかりしれないものがあります。

それからまたほぼ10年、平成元年に広島市現代美術館が開館しました。公立として、日本ではじめてコンテンポラリーを冠につける美術館で、全国で話題をさらいました。ちょうどその頃、私が所属している学会、美学会の全国大会が広島で開催されました。それまでに東北大学で1回、九州大学で1回、金沢市立工芸大学で1回、それ以外は東京か関西でしか行っていなかった大会の招致は、広島が芸術の拠点として名乗りをあげたことを意味していました。大会の前日、現代美術館と共催で、美学会の若手研究者がパネリストになって、現代美術のシンポジウムを開催しました。大きな反響がありました。美学会では、その時を皮切りに、現代美術の研究発表が可能になりました。それからしばらく美学会の全国大会を引き受ける大学は「広島につづけ」との合言葉で、斬新な企画を実験しました。

さらに数年後平成8年広島県立美術館がリニューアルして再出発しました。ひたすら経済発展を目指していた戦後の時期を終えて、広島市、広島県が文化、芸術に力を入れ始めた時期に、私が広島に着た時期が、ピタッと一致しています。広島市現代美術館と広島県立美術館のリニューアルには、ずいぶん力をそそぎました。

昭和60年代から平成に入る頃、公立美術館だけでなく、公立文化ホール、コンサートホール等が次々に開館しました。美術館では、建物だけでなく、美術品購入も行われました。だが平成10年代に入ると、その動きがパタッととまりました。公立施設の運営が今問われています。美術品購入費もストップしました。

技術革新にともない、テレビ、DVD、DM等の技術がかぎりなく発達したために、かつてのように美術館や市民ホールへの期待が少なくなっていることは否めないと思います。交通手段が発達して、人びとは国内だけでなく、海外にも気楽に出かけられるようになりました。しかし今、時代の変わり目です。

阿部任君が抱きつづけた芸術への意志、被爆の廃墟のもとでなお絵を描こうとした市民画家たちの意志が、ふたたび必要とされる時代になっていると言えるのではないでしょうか。私たちは、困難な時代に、芸術や美の力を信じたいと思います。

（平成23年3月31日記）

（かなた・すすむ／広島大学名誉教授、広島芸術学会会長）